

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	俳体詩 : 文苑
Author(s)	越呉坊
Citation	龍南會雜誌, 110: 36-37
Issue date	1905-03-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5804
Right	

ふく朝風にきら／＼と

梢に清き雫あり

白波よする砂の上に

ふめば聲あり貝の殻

沖遙かなる横雲の

彩の扉のひらかれて

俳 躰 詩

暖

半胴の水に朝日さして

きら／＼天井に映る

目荒き障子

額あたたかき程の明さ

白馬曰。冷たい土間につくねんとして雞一羽。米もなし。

越 吳 坊

白馬（評点）

朝日の影のわくところ

世は『よろこび』の色にみつ

疑ひ悶ね悲哀の

胸の惱みの消へぬ子よ

つきぬ自然の領に入り

高きあしたの『聖』巨きかずや（了）

硯の蓋に埃見へて

臍に鳥籠いびつ

度合はぬ幻燈のごと

宙返する山雀可笑し

白馬曰、破垣から顔を出した猫、惜むらくはれむさう也。

餌猪口の縁怪げにつかみ

糞落ちてぬるみし水

嘴につけて仰向く。舌動く

首振れば障子に水散る

白馬曰、針仕事をやめて若い奥様が障子をあげた。

瘡せて居る。

○ 槿木に口の露拭き

麻の實をさへてつゝく

適々こぼれて縁に落ちる

其の音。春の日静か

日 永

轆轤師の店に

ぐるくくく

踏む足ものうく

白馬曰、十三四の子守が歸つて来て、屑の中に眠つた

小兒を下す。

○

繪の具とぎし茶碗

せまきあいだに

彼岸櫻

獨樂をくる音

ぐるくくく

屑暖かし

染めし獨樂乾す

親猫ねむり

店に散り来る

○ 白馬曰、板條に張物。

こまりそうな

○ 店先に合す

正午^{ひる}を示す糸の影に ねちかける音眠し

白馬曰、小供が書寝していびきの音あり。ねちかける

は土間から来たたすき掛の若嫁

○ 裏返したる足袋

火鉢火消へて

向ひの床屋に

白馬曰、轆轤師の家甚だ雜駢、床屋一寸小奇麗也。

○ 食事すみて

遠くに鐘の聲

獨樂五十くりて

白馬曰、日甚だ永哉、呵々。

又曰、面白くおかしい所にはれ込んで、編輯同人のね

叱りをも顧みず一寸愚評を加へたわけ。